

12. 利用者アセスメントとネットワークづくり(口述発表II-1, 保健・医療・福祉サービスの充実のために, 2007年度青森県保健医療福祉研究発表会抄録)

著者	町田 徳子, 田中 貴子, 前中 貴次
雑誌名	青森県立保健大学雑誌
巻	9
号	1
ページ	81-82
発行年	2008-06
URL	http://doi.org/10.24552/00001889

利用者アセスメントとネットワークづくり

町田 徳子¹⁾ 田中 貴子²⁾ 前中 貴次²⁾

1) デイサービスはっこう

2) 八甲学園

Key Words : ①アセスメントの重要性 ②システムの構築 ③移行支援

I. はじめに

私たちは、児童デイサービスと知的障害児施設に勤める職員である。利用されている方は知的障害があり、発達障害も併せ持たれている方が多く、これらの障害は、ともに「目に見えない障害」である。私たちが携わっているお子さんたちも、私たちの職場での見解と、家庭での見解、学校での見解が大きく異なる。これにより、支援が行き詰まり、次のステップへ繋がらないことがあった。

II. 目的

知的障害や発達障害のある方の多くは、自らの状況や自らの気持ちをうまく伝えられず、誤解されることがあり、生きにくさを感じられている。私たちは、障害を持たれた方たちが誤解されずに、自らの努力が報われるような地域のシステム作りを目指した。

III. 研究方法

ここではアセスメントとして、自閉症・自閉傾向が認められるお子さんへ「PEP-R (教育診断検査)」と「AAPEP (青年・成人期心理教育診断評価)」を用いた。結果、本人の自閉症特有の学習スタイルや行動の特徴、発達のアンバランスさを明らかにした。

また、ネットワークづくり(報告会など)で、ニーズと現状での療育ポイント(できそうなところ)を確認し、発達課題や将来必要と思われるスキル・環境・配慮へ結びつける手立てを模索・検討した。

1. 事例A 3歳9ヶ月 男児 広汎性発達障害
1) アセスメント(フォーマル・インフォーマル)

平成18年11月(本人2歳8ヶ月時)に教育診断検査(PEP-R)を実施した。

2) ネットワークづくり

検査結果を基に、検査者・保護者・通所施設・言語訓練機関(クリニック)・幼稚園・他福祉機関等の職員で話し合いを行った。検査からも確認されたことだが、微細運動スキルの弱さが見られ、ここは保護者が向上させたいと思っていた領域であった、2語文の形成、スプーン使用から箸使用への移行が療育目標として挙がり、家庭・デイサービス・通園施設・言語訓練機関(クリニック)・幼稚園・他福祉機関で役割分担を図り、支援計画へ反映させた。

3) 再アセスメント(フォーマル・インフォーマル)

平成19年9月(本人4歳6ヶ月)教育診断検査(PEP-R)実施した。その際、保護者・言語聴覚士・発達障害者支援センター職員が立ち合い、情報共有を行った。

4) ネットワークづくり

再アセスメント結果を基に、検査者・保護者・他通園施設・幼稚園・発達障害者支援センター・他福祉機関の職員を集め、現状についての情報交換と今後の支援目標について話し合った。この際、箸使用への移行について話題となり、結果、時期尚早ということで、段階を踏んで箸使用へ辿り着くよう支援計画を見直した。また、模倣スキルの伸びが検査から確認され、報告したところ、全ての機関で意見が一致した。伝えるべきことについては、支援者が一度演じて見せることで理解しやすいということを再確認しあった。

2. 事例B 17歳1ヶ月 男 知的障害 自閉性障害傾向あり

1) アセスメント(フォーマル・インフォーマル)

平成19年9月に青年・成人期心理教育診断評価(AAPEP)を実施した。

2) ネットワークづくり

検査結果を基に、検査者・保護者・学校教諭・ケース担当者で話し合いを実施した。なかでも、金銭

理解の未熟さ（細かいお金を組み合わせた買い物）やコミュニケーションでの躓き（壁へ向かって要求するなど）が見られ、家庭・学校・当施設で役割分担して、協働していくことを確認した。

12月には、当施設の職員全体へ、本人の検査報告を実施した。

検査者は、本人の持っている力の代弁者である。その人とは別に、中立の立場で、それぞれの支援機関の連携調整役を担うコーディネーターが、検査者と密に協力することで、本人を中心としたシステムが構築された。

Ⅳ．結果・考察

個々の障害特性に基づいた支援プログラムを展開するためには、本人をよく知ることが大前提である。なによりも、アセスメント（検査など）の結果が、保護者を始め、他機関とのコミュニケーションツールとなり、本人を中心に据えた話し合いがより深まった。

適切なアセスメントをすることで「これから取り組むべきこと」「個別支援計画」「移行支援計画」の方向性が見出すことができ、その人を尊重することで、自立へ導く有効なアプローチへとつながった。

お子さんの将来を考える上で、「仲間づくり」⇒「システムの構築」が必要不可欠である。家庭・学校・福祉機関・行政機関・地域という「点と点」では支援は繋がらない。こうした点と点を太いパイプで繋ぎ、情報や知識・技術を共有できるシステムを構築すること、更に拡大させていくこと。そうすることで、障害を持たれた方が生きやすい世界（地域）になると考えられる。

Ⅴ．文献

「自閉症の人たちを支援するということ」朝日新聞厚生文化事業団